

## 印象13編 —2021年8月の総評に代えて

○林 桂○

\* 名前を伏せての作品から、まちりこさん(5編)、春町美月さん(4編)、翠さん(3編)の作品を、敢えて探し出したのではないかというような結果に三度驚いている。若い投稿者の中では、ベテランの年齢と言ってよいだろう。編数を絞り込む作業の中では、完成度の高い作品に自ずから引き寄せられてしまったのかもしれない。

●まちりこ●(埼玉県)

流れ星を見つけた。

金魚を埋めた場所を思い出す。

\*あるいは、作者には「流れ星」と「金魚のお墓」を結ぶ経験があるのかもしれない。しかし、まったく脈絡なしに突然にあらわれた「金魚を埋めた場所」のイメージの面白さとしてここでは読んでおきたい。

●春町 美月●(大阪府)

黄バイエル62番の

キラキラシールは

遠くへお嫁に行く花嶋先生の

ごめんね

\* 提出物に花丸や検印の代わりに、シールを貼って返す先生がいる。このシール欲しさに宿題を頑張る小学生もいるのだ。若いピアノ教室の先生も、シールを貼ってくれていた。最後の授業に貼ってくれたシールは特別に輝くシール。それはご褒美のシールという意味だけではなく、途中で辞めてしまっただけで「ごねんね」の意味があったのだと回想する。そのシールが今でも心に輝く。

● 春町 美月 ● (大阪府)

近所で

フランス人形と擲揄されてた

レースづくめの老婆の

幸福感を思い出す

今

\* いわゆるロリータファッションのおばあさん。当然、隣近所からは奇異は目で見られていただろう。しかし、「今」思えば、そうした人の眼を振り切って、自分の「幸福感」のために着飾っていたのだ。その意味が理解できるようになったのである。

● まちりこ ● (埼玉県)

憂鬱はいつも、遅れてやって来る

たとえば、雨のあとの夕闇

\* 確かに「憂鬱」には事後性がある。何ごとかが終わった後に訪れる。事の「雨」、事後の「夕闇」ともに暗いが、「雨」の後の「夕闇」であってこそ益々暗さ憂鬱さは増す。

● まちりこ ● (埼玉県)

この世には叶わないことが  
多すぎて  
お花に水を  
あげたりしている

\* こんな気持で花に水をやっていたときがあったような気にさせられる。水をやりながらの花との会話は、世からの逃避の一瞬かもしれない。

● 春町 美月 ● (大阪府)

どこかでバースデーソングを  
覚えて来た二歳児が  
エンドレスに誰かを祝う

\* 誕生日の意味は理解できなくても、他人を祝福するという意味は理解できたのであろう。そしてその気持を繰り返す。こなると誕生日の祝いではなくて、誕生そのものを祝う気持の歌となっているだろう。

● 翠 ● (東京都)

焼き立てのパンを切ったら  
ヒマワリの匂いなんて  
知らないのにしている気がする

\* ヒマワリは、きつとこんな焼き立てパンの匂いに違いないと思う。ヒマワリの花の中心はカリッと焼けている。

● 猫谷圭希 ● (広島県)  
高校生最後のホームルーム後  
あの子はさっさと帰って行った

\* 多くの生徒が別れがたい思いの余韻に浸っているなかで、そんな感情は微塵もなさそうに帰ってゆく「あの子」。その子の高校生活がどのようなものであったかを如実に物語る。それを知った瞬間である。

● 春町 美月 ● (大阪府)  
葛の葉に覆い尽くされた  
暗い地面には  
狂気が埋まっている気がして  
足がすくむ

\* 俳句を書いている身からすると、「狂気が埋まっている」で書きとめたい気がする。それにしても、葛の葉闇の持つ本意を見事につかまえている。「葛の葉の」は「怨み」にかかる枕詞だったはずであ

る。

● まちりこ ● (埼玉県)

夢から覚めれば 悲しみは  
波から明けてくる

\* 二行目の「波から明けてくる」が不思議。主語は「悲しみは」である。悲しみは明けてくる、晴れてくる、という意味だろうか。それとも、はっきりとしてくる、明瞭になってくるという意味だろうか。「波から」が、その不思議感を助長している。

● まちりこ ● (埼玉県)

哀しみは異国の夜のサーカスの  
空中 ブランコみたいに揺れて

\* 「空中」と「ブランコ」の一字の空白が目を惹く。「空中」は「哀しみは」を受けとめている。そして、「空中 ブランコ」となって揺れる哀しみの比喩に転じて行く。

● 翠 ● (東京都)

米を研ぐとき  
わたしは神につかえている

\* 村上鬼城の句に「新米を食うて養心と魂かな」がある。米は日本人にとって、食物以上の意味があったのだろう。米を研ぎながら、そんな日本人の心性が作者に

も訪れたのだろうか。

● 翠 ● (東京都)

わたし万年筆に  
金魚の昼寝って  
なまえをつけたの

\*「金魚の昼寝」は童謡から来ているの  
だろうか。鉛筆やボールペンとは違って、  
「万年筆」は大人の筆記用具である。その  
ちぐはぐな取り合わせの妙が、人目を引  
き、留めさせる。